
カナデちゃんとヤミちゃんが機動戦士ガンダム S E E D で暴れるよ～！

メア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カナデちゃんとヤミちゃんが機動戦士ガンダムSEEDで暴れるよー！

【Nコード】

N3078Z

【作者名】

メア

【あらすじ】

アンラ・マンユ暇潰しの為に殺された人々の意識が集合体となってガンダムSEEDの世界にチート貰って転生させられた。

転生させられた先は、ユージン・ヒビキが生き残ったところ………
…つまり、キラとカガリの妹なんだ。

そして、ルナティックコーディネイターに改造されたので、世界を

滅ぼしたら、リコールくらいでした。

ヒロインはステラ、ルリ

世界の破壊

何処にあるのかも分からない空間に一人の声がする。

ここはどこ、ぼくはだれ？

「ここは死後の世界、お前は死者達の集合体」

死後の世界？ 学校がいいな？ 集合体って事は寄せ集めか……だから記憶がないのか。

「あれは幻想。そしてなぜに疑問形？」

なんとなく……？ それで、天国？ 地獄？ なんで死んだの？

「支離滅裂だな。まあ、我の暇潰しの為だけに殺したのだし、天国でも地獄でもないな」

そっか……ならいいや……

「あっさりしているな」

ゴスロリ少女に殺されるならほんぼうだから？

「ヒデオの変わりの暇潰し要員には良さそうだ」

褒められた！ やったね？

「さて、いい加減本題に入るが、貴方達には転生してもらうのチートもらえるならいいよ？」

「くれてやるチートは五つだ。何がいい？」

何でもいいの？

「うむ。このアンラ・マンユに不可能は無い」

なら、努力すれば何でもできる才能上限無しと知っていれば何でも召喚できる召喚魔法、召喚した対象を服従させられる能力？
あつ、もちろん全て説明書つきでね。

「どれもアホな力じゃな。他の二つはどうする？」

後はいらないや？

「なら、こっちで適当に改造しておく。精々我を楽しませろ」

アイアイサー！

新たな生命が産声を上げた。

「あなた、可愛い女の子よ」

「うむ、この子はいいい子に育つだろう」

幸せな家庭だね！

でも、実際は……………こつち。

「あなた、何をするの！？」

「ふははは、私は実験に成功しスーパーコーディネイターを作り上げた！ 故に、私はスーパーを超えるウルトラ……………いな！ ウルトラを超えるルナティックコーディネイターを作りあげる！」

わあゝマッドさんだゝゝ！

「やめてえっ！」

「うるさい、邪魔だ！」

銃声が聞こえて、母親らしき物が出来上がった。

「もはやブルーコスモスにも邪魔させぬ！ ふはははははははははははは！」

それから、培養槽に入れられて身体中をいじくられました。身体の中はぐちゃぐちゃ、脳は量子コンピュータが取り付けられたり、苦痛やなんやらで精神が壊れかけた。

一年が立って、動けるようになったので、血文字で召喚陣を書いて召喚を行った。

「来たれアンラ・マンユ！」

世界に穴が開き、中から闇そのもののがはい出て来た。

「何よ、いきなり呼んで……………」

「世界を滅ぼして」

「ふざけ……………あれ？」

アンラは命令に従い、世界は闇に飲まれ無に帰した。

終わり。

「てっ、終わらないわよ！」

あははは！

「で、なんでこんなことしたのよ？」

あんな世界壊れていいよ！というか、女の子だったし！

「まあ、ランダムとはいえ、あの狂気科学者凄いわね。実際、ウルトラなら成功してたかも」

で、どうすんの？

「私は結構満足したけど、暇潰しにはなってないのよね。リコールよ。能力に神の召喚、従わせるのは禁止して、弱体化の変わりになんか付けとくわね」

了解、行ってきますっ！

新たな目覚め？（前書き）

なぜか投稿できていなかったなので再投稿

新たな目覚め？

目覚めたら、知らない天井が眼に入ったよ。

「気が付いたか」

「おじさんだれ？」

「ウズミ・ナラ・アスハだ。そして、こっちが姉のカガリ・ユラ・アスハだ」

「……………（こく）」

アスハ家とはまた色々とまずいね。いや、好き勝手にできるからいいかな？

「お父様、もういいか？」

「そうだな、後は任せる」

お父様が去っていった。残ったのはカガリ。

「いいか、お前はカナデ・ユラ・アスハだ。そして、私の二歳年下だから、私が姉だ！」

名前がカナデか。カガリを見るに、カガリは六歳くらいだから、私

は四歳かな。

「おい、聴いているのかっ!?!」
聴いてません。

「おねえさまあ、カナデはねむいのでとうみんます」

「おいっ、待てっ!?!」

「Z Z Z Z Z」

「もう、寝てる……………」

「カガリ様、どこですかっ!」

「くっ、もう来たか……………」「ここは逃げるしかない!」

カガリは何処が行った。これでよしと。

「とりあえず、鏡さん鏡さんどこですか」

部屋は何て言うかファンシーで、ぬいぐるみがいっぱいある。それも、4LDKが出来そうなくらいの部屋をまるまるうめつくすような数だ。その中で鏡を探すために適当に頭に受かんだフレーズを口ずさんだ。

「ここですよ」

「反応が返ってきた!?!」

天幕付きのベットの後ろから声が聴こえて来たので、そつちをみると姿見の大きな鏡があった。

「ちやお」

「ちやお」

鏡の中には、金色の蒼瞳で蒼銀色の長い髪をした天使のような美少女と同じく全身真っ黒なゴスロリ少女がいた。

「さて、なぜなにマンユが始まるよ」

ドンドンパフパフなどの効果音が聴こえた。

「アシスタントは、私アンラと私アンリでお送りいたしま〜す〜」

「同じ人物じゃない」

鏡の中で分裂したゴスロリ。

「まあまあ、気になる質問を答えるよ、貴方がAngelBeats!の世界に行きたかったみたいだから、私が貴方の容姿をAngelBeats!の天使ちゃんにしてあげました」

「わ〜〜いらない事しやがっ〜」

「.....」

「貴方は右脳と左脳にエブレインという超高性能量子コンピュータ

「が取り付けられているわ」

流したな。

「そこにAngel Playerも入ってるし、貴方はマシンチャイルド、ニュータイプ、イノベーターでもあるから気をつけてね。原作は10年後だから、後は好きにきなさい。ステータスも開けるし便利なものもついてるしね。後、何人かサポート要員召喚しといだから、頑張ってね」

「結局、チートは何だったんだ？」

ブレインで調べてみると、錬金術が出来る事が判明した。後、身体が賢者の石だから質量無視で錬成できるよ。

「まあ、ステータスを開くこうかな」

ステータス
技術レベル 1
開発レベル 1
操縦レベル 1
戦闘レベル 1
経営レベル 1
肉体レベル 2
召喚レベル 1

どうやら、強いのを召喚出来ないみたい。最初だけコストとか完全無視で良いみたいだね。戦艦と機動兵器、パイロットならなんでもよしか。まあ、最初は放置だけど。
明日から頑張ろう。

次の日、身体は動くのでサボりにやって来た力ガリを捕まえて家庭教師の勉強と一緒に受けた。

その後、グロツキーになっっている力ガリを放置して、図書館で読書しながら、エブレインを使ってモルゲンレーテ社とプラントにハッキングをかけて技術を吸収した。それから、エブレイン二つとマシチャイルド、ルナティックコーディネイターの力をフル活用して開発と技術力の向上を行い続けた。

行動開始してから三年間がたった。

やったことは相変わらずの技術力と開発力を鍛えながら、戦闘技術を練習した。ガードスキルを天使ちゃんに操れるようになった。錬金術は金やダイヤモンドを錬成して売り払いまくって、オーブに近い無人島を買い取って、地下に秘密基地を錬成した。後は、ボゾンジャンプなどの訓練をやり続けたらCC無しで問題無く転移できるようになった。

「さて、いい加減戦力を召喚しよう。召喚するのはこの世界では異質な存在……………我が喚び声に答えよ！」

秘密基地の奥深くで召喚された機体とパイロット。

機体名：モルドレッド

形式番号 RZA-6DG

分類 ナイトオブブラウンス専用KMF
製造 ブリタニア
生産形態 ナイトオブシックス専用機
全高 4.71m
全備重量 10.23t
推進機関 ランドスピナー
フロートシステム
武装 シュタルクハドロン（4連ハドロン砲）
小型ミサイル
特殊装備 ブレイズルミナス
乗員人数 1人
搭乗者 アーニヤ

モルドレッドは、アーニヤ（ナイトオブシックス）専用KMF。凄まじい砲撃性能と防御力を誇る重量級KMF。その火力とパワーによる強襲戦闘を得意としている。基本カラーは赤紫。

主武装は両肩にある二対の装甲を連結させることで構成される4連ハドロン砲・シュタルクハドロンであり、浮遊航空艦でさえも一撃で破壊してしまうほどの威力を誇る。また全身に小型ミサイルが内蔵されており、総合的な火力はケタ違いとなっている。超重装甲と機体全周をカバーするブレイズルミナスを併せ持ち、防御力も最高峰のレベルである。

機体の出力も極めて高く、KMFの頭部を片手だけで粉碎するパワーと、重量級ながらグロースターにも匹敵するほどの機動力を併せ持つ。

「ここは……………どこ？」

彼女はアーニヤ・アールストレイム

「ナイトオブシックス」の地位に就いている少女でマントの色はピ

ンク。ピンク色の髪を頭の後ろでまとめている。幼いながらも最年少でラウンスとなった凄腕。

「ここは私の秘密基地」

「貴女が私のマスター？」

「そう。私が貴女のマスター。後、記憶は戻ってる？」

「……………戻ってる……………」

記憶が戻った事に泣いて喜ん出入るアーニヤを抱きしめて、しばらく宥めていた。

「私はマスターに従う」

「ありがとう。なら、先ずはモルドレッドを改造しよう。アーニヤは適当に基地内を見学してて」

「わかった」

アーニヤが去った後、モルドレッドをハンガーにセットして、機体を弄る。今のままじゃ、ガンダムとの大きさが四倍も違う。

「まず、動力炉を相転移エンジンに変えて、ディストーションフィールドとディストーションブラスト、装甲にPS装甲フェイスソフトを追加、さらにブースターとGキャンセラー、腕は紅蓮参式の奴でいいや」

モルドレッドの大きさも大きくなって15Mくらいになった。当然、ミサイルの発射数を増やした。

「さて、これから楽しくなりますね」

モルドレッドの改造が終わり、次の目的を狙うことを開始した。

アーニヤさんの魔改造

Side アーニヤ

私が召喚された時は、ブリタニア皇帝ルルーシュ君との最終決戦で、オレンジの人に殺されそうになった時、ここに連れて来られた。
「うん……………記憶、戻ってる……………嬉しい……………」

あの人が私の身体を好き勝手に使ってたんだ。それは許せないけど、それより皆が気になる。

「……………でも……………今の私は……………マスターに従うだけ……………」

記憶の御礼もあるから、今は私の全力でマスターをサポートする。

「……………それにしても、面白い……………」

地下はドックや研究所などの施設、地上は、ブリタニアの宮殿のよ
うな施設と遙か太古に滅んだ恐竜が沢山いる。

「……………記録……………」

「グルルルウ！」

記録を録りながら歩いていると、大きな口を開けながら迫って来る

ティラノザウルスに携帯を向けて写真撮った。

「って、何してるの!」

「がふっ!？」

私の目の前で大きく口を開けて、私を食べようとしていたティラノザウルスの頭にマスターのキックが入り、ティラノザウルスは吹き飛んで行きました。

「……………何って……………記録……………?」

「……………もういい……………地上には勝手に出ないでね。獵犬がわりにホムンクルス放ってるから」

「……………わかった……………」

……………淒く残念……………無念。

「そんなに残念がらなくても……………まあ、時間が空いたら一緒に散歩しようか」

「うん」

なら、いい。

「さて、アーニヤ、次は君の番だから行こう」

「?」

分からないので小首を傾げてみたけど、連れて行かれた。

連れて行かれた場所は研究室。

「そこに裸になって寝て。検診とか色々するから」

「分かった」

言われた通り裸になってベットに寝た。

「っ」

注射を打たれて、点滴を入れられた。

「それじゃ、お休み……………」

私は意識がだんだんと無くなって来た。

次に目覚めた時、私は培養槽の中にいた。

「……………ん……………」

「起きた？ 気分はどう？」

「頭が痛い」

脳裏に色々と分らない言葉が浮かんで来る。

「アーニヤには、イブレインとマシンチャイルド+イブレインにゼロシステムを組み込んでおいたよ」

「？」

イブレインはこの脳裏にあるパソコン？

ゼロシステムとかマシンチャイルドって何？

「マシンチャイルドはIFSとの親和性を高めた存在だよ。IFSは人間の思考をコンピュータに入力できるインターフェースで主にパイロットの機体操縦に用いられる。操縦者のイメージのみで操作する事が出来、煩雑な操作を簡略化する事を可能とした代物だよ。IFSは体内にナノマシンを注入し、補助脳を形成しこれによってイメージを機体へ伝える。このナノマシン注入には不快感を伴い、またナノマシン処理中は精神が不安定になりやすく、場合によっては幻覚（幻聴）を伴うこともあるらしいけど、そっちは改良しておいた。脳にあるイブレイン………生体コンピュータがアーニヤのイメージ通りに身体や機体を動かしてくれるよ」

「なるほど………ゼロシステムはまた別？」

「ゼロシステム（Z・E・R・O・System）、正式名称「Zoning and Emotional Range Optimized System」（直訳すると「領域化及び情動域欠落化装置」）とは、分析・予測した状況の推移に応じた対処法の選択や結末を搭乗者の脳に直接伝達するシステムで、端的に言うと、勝

利するために取るべき行動をあらかじめパイロットに見せる機構だよ。

これは、コクピット内の高性能フィードバック機器によって脳内の各生体作用をスキャン後、神経伝達物質の分泌量をコントロールすることで、急加速・急旋回時の衝撃や加重などの刺激情報の伝達を緩和、あるいは欺瞞し、通常は活動できない環境下での機体制御を可能とする。更に外部カメラ、センサーによって得た情報を、パイロット自身の視聴覚情報として伝達することも可能である。このため、通常のモニター機器は補助的なものでしかなく、基本的にコンソール中央部の球状リーダーおよび周囲壁面に表示されるエネミーマーカーのみで戦闘行為を行う。

まあ、本来機体につけるものをエブレインに投入したんだ。だから機体を自分の肉体に置き換えたり、その逆もできる。簡単に言うとなら、IFS、エブレイン、ゼロシステムの組み合わせで、ほぼノータイムで自身のやりたいように機体を動かして、未来予測で確実な殲滅を可能とする」

「一騎当千？」

「多分」

「問題は、ゼロシステムに踊らせられない事、最優先はアーニヤの生存でいいからね」

「了解」

とりあえず、色々便利になったと思えばいい。

「あつ、写真とかエブレインで撮れる？」

「もちろん撮れるよ」

「嬉しい……………」

早速、写真などの記録をエブレインに移した。

それから、鈍った身体のリハビリを行った。その次に、格納庫に行き、大きくなった私の愛機モルドレッドを見た。

「胸部にグラビティブラスト発射装置、ハドロン砲はくつつけ無くても威力は出るし、拡散タイプの追加と威力の増強、遠隔操作装置などに加え、腰にビームライフルも取り付けといたから、シュミレーターで訓練しておいてね」

「分かった。マスターはどうする?」

「私はホムンクルスの実験だよ! 人が欲しいからね」

「頑張つて」

「アーニヤもね!」

去って行ったマスターを見送り、私はシュミレーターに入った。

「ゼロシステム、IFS起動……………ミッション開始……………」

それから、5時間ほど訓練して、ようやく扱えるようになった。ボソソソジャンプはまだ怖いけど、そのうち克服する。

Side Out

アーニヤちゃん可愛いよ。あの無表情がいいね。

「さすが最年少でラウンズに入っただけはあるね。もう、モルドレツドを扱い出してる」

こっちの作業も出来たし、ホムンクルス……………自動人形でも動かせるかな。

「うん、問題無し」

とりあえず、100体ほど作って生産プラントの作成と施設の維持をやらせる。まあ、錬成した方が早いけど面倒だしね。

「電話だよ、電話だよ」

「ありがとうハロ」

自動人形の統括システムとして、サイコハロを作ったから問題ない。

「もしもし……………」

『カナデ、部屋にいないようだが……………もうすぐ時間だぞ。何処

にいるのだ?』

しまった、今日は社交界だった。

「お父様、カナデは知り合いを連れて行くので少し遅れます」

『知り合いだと?』

「はい。私の護衛をして頂く契約をしました」

『勝手な事をするなど言いたいが、お前は力ガリと違って聡い子だから責任を持つなら好きにして構わん』

「ありがとうございますお父様……………」

『うむ、出来る限り早くこい』

「はい」

ふう……………ハーモニクスを置いて置くんだったね。

「アーニヤ、帰るから一緒に行こう!」

「分かった」

アーニヤを呼んでから、研究室でハーモニクスを起動させ分身を作る。

「「ジャンケンポン、アイコデショ!」」

「勝った！」

全員がゼロを使ってジャンケンを行い、勝者が基地に残るんだ。

「オリジナルが負けた……………」

「「それじゃ、カガリの相手よろしく」」

「ふんだ……………アーニヤとイチヤイチヤするもん」

五歳の時からハーモニクスを使い、研究や開発などを同時進行で行っている。そのため、負けた奴が大変な目に会う。社交界とか面倒なんだよね。

アーニヤの手を握って基地から屋敷の近くにボソソジャンプして、部屋に戻った。

「アーニヤ、ちょっと待ってて」

「うん」

急いでメイドが来る前にドレスに着替える。アーニヤはベツトに腰掛けて足をぶらぶらさせているけど、アーニヤの格好自体はラウンズの儀礼服だからパーティーに出ても問題無い。

「お嬢様っ！」

「あつ、もう着替えてますよっ！」

「私達の仕事を取らないでください！」

だつて、着せ替え人形みたいで嫌だからね。

「その方は？」

「この子はアーニヤといって、私の護衛及び話し相手です」

「……………よろしく」

「「分かりました」」

多分、話し相手の方を信じたんだね。身長差はまだあるけど、アーニヤの方がお姉ちゃんに見える。

「こちらにどうぞ」

私はアーニヤの手を握り、魔窟へと赴いた。

パーティー会場は厳重な警備体勢が引かれていた。

「今日は厳重なんですね」

「はい、今日は財閥の方々がいらっしゃいますし、お嬢様の誕生日ですから」

「確かに今日でしたね」

「マスター、おめでとう」

「ありがとうございますアーニヤ。今日で八歳になりました」

そんな話をしていると、大きな扉のところに着いたら、大きな声と同時に扉が開いていきました。

「カナデ・ユラ・アス八様、御入場っ！」

中に入ると、私と後ろに控えているアーニヤに注目が集まり、逃げるようにお父様のところへ行きました。

しばらく挨拶などの鬱陶しい事をこなしていた。

「ねえ、アーニヤ。どうせくれるなら、ソキウスのデータや戦艦が欲しいよね」

「ソキウスは分からないけど、戦艦は欲しいね」

まあ、ボソソジャンプで転送出来るんだけどね。

「何言ってるんだカナデ？」

「お姉様、御機嫌うるわしゅうございます」

「お前、おちよくっ……………お父様が呼んでたぞ」

私に手をあげようとした瞬間に発つせられたアーニヤの殺気に飲まれたね。

「ありがとうございますお姉様。アーニヤ、行きましょう」

「イエス、ユアハインス」

さて、お姉様を放置してお父様の所に来たんですが………
…非情に帰りたいです。

「来たかカナデ。こちらにいらっしゃるのはアズラエル財閥の方だ」

「初めまして、美しいお嬢さん。私はムルタ・アズラエルといいます。以後、御見知り起きを………」

なんでブルーコスモスの人がここにいらっしゃるんですか、殺していいですか？

ちよつと、Angel Player 起動させますね。

「……カナデ・ユラ・アスハと申します。アズラエル様」

「はい。そちらのお方は？」

「私の護衛をお願いした愛人………こほん、友人です」

「「………」」

「冗談ですよ？（多分）」

白い目で見られちゃいました。

「まあ、いい。アズラエル氏はお前を婚約者にしたいそうだ」

「あははは……………お父様、冗談が美味しいですね」

「本気だ」

「そうです。私は貴女が欲しい！」

「何を馬鹿な事を……………ブルーコスモス盟主である貴女がコーデイネイターの私をですか？」

バットエンド丸見えじゃないですか、このロリコン！

「何故それを……………」

「もう、決まった事だ」

さて、どうする？

ムルタを殺してアズラエルの材料を得る？

錬金術で事足りるし必要無い。なら、利用して捨てるか。サハク姉妹も気になるけど……………後回しでいいかな。

「分かりました。ただし、ある程度自由にさせていただきますよ」

「ええ、勿論。これでオーブと我が財団の繁栄は約束されました。これからよろしく願います」

「こちらこそ、よろしく願います」

アズラエルは私を人質とストレス解消、駒にしたいんでしょうが、私の思い通りに踊って貰いましょう。

「狐と狸の化かし合い？」

狐は九尾でしょうけどね。

第八研究所 1

あれから少しして、アズラエルの家に連れていかれました。
そして、すぐに襲われそうになったので逃げて自分に似せた自動人形と入れ代わった。

「私の人形、凄い事されてるね」

「始末する?」

「始末するべき」

犯されている自動人形を見ながら、多数のハーモニクスと会議する。

「女として許せない……………」

「男の私達は平気だけど?」

「むしろしたい」

「……………」

私達の意識の元は、男6女3その他1だから、ハーモニクスの状態になるといろいろ凄い事になる。

性格には男の4はオタクだしね。

「今殺せば、歴史が変わるから駄目」

「そうだけど見てられない」

それかも話し合いは平行線を辿った。どうせ意識も無い自動人形という意見があるからね。

「なら、私達は勝手にする」

「そう、分かった」

「じゃあ……………バトルロワイヤル……………勝者に全意識が集積する事。勝負はSEED終了まででいい？」

「」「異議なし」「」

いつの間にか、オリジナルを無視して決まった。

「これは……………手段を選べない」

「召喚や錬金術は使用回数制限は一人三回まで、令呪は奪取可能とします」

令呪は召喚した対象に出る。気付かなかったけど、アーニヤのは背中にあった。

「アーニヤは私が持つてくよ？」

「「「うん」「」」

「後、世界崩壊級などは無し、秘密基地は完全中立で開始は一週間後……………」

細かいルールが決まり、ハーモニクス達は出て行った。
これって、最強の敵は自分？

あれ？ しかもアズラエル押し付けられてないかな？
やられた。

アズラエル家の一室。

「アズラエル様……………この二人、完全に反応無くなりましたぜ？」
床には私とアーニヤの人形が倒れている。今までの反応だって面白
半分でハーモニクス達がやってただけだし。

「ちつ、化け物の癖して以外に壊れるのが早かったな」

「コーディネイターなんてこんなもんでしょ」

「なら、第八研究所に送っておけ。エクステンデットのサンプルに
なるだろう……………五体満足で殺さないようにだけ注意しておけ」

「了解」

これは都合がいいね。戦力入手のチャンスだよ。

三日後、私達の人形が輸送されるのをアーニヤと共に、上空からモルドレッドで追っている。

「目標、以前こちらに気付いていない」

私の後ろからアーニヤの声が聴こえる。これは、私がアーニヤの膝の上に座っているから。

狭いコクピット内じゃ仕方ないし、モルドレッドは意識だけでも操縦出来るから問題は無い。

「暇だから、盗聴でもしてみる？」

「うん」

アーニヤが素早くコンソールを操り、人形から音声を拾って来る。

「おい、積み荷のお嬢様はどうだ？」

「相変わらず壊れたままだ」

「そうか、俺も後で楽しませてもらうか。しかし、いいよね〜」

「何がだ？」

無事に盗聴できたみたい。

「面白い？」

「まだ、分からない」

アーニヤの質問に答えつつ、盗聴それた音に耳を傾ける。

『アンタって、今期から配属だろ？』

『ああ』

『研究員はモルモットの連中を好きに出来るんだろ？』

『確かにそうだな』

モルモットか……………やっぱり地球連合腐ってる。

「マスター」

見捨ててる時点で、人のこと言えないけど。

それに、アーニヤを改造したんだから同じ穴のムジナ。

『女なら犯りたい放題じゃねえか！ うらやましいねっ！』

『まあな。ただ、結果を出さなきゃいけないがな。しかも、処理道具として実際に使わないと駄目だし、調査が入るらしいがな』

『面倒だが問題ないんだろ？』

『おそろくな……………』

なるほど……………介入決定。ハッキングをかけて細工をする。

『まずい、燃料がマシントラブルかしらねえが、流れ出てやがる。補給しなきゃまずいな』

『大丈夫なのか？』

『ああ。近くの町に寄る』

『了解した。連絡はしておく』

チャンス。

「アーニヤ、近くの町に先回りして」

「了解……………」

モルドレッドの速度で輸送機を追い越して、町へと急ぐ。

町に着いたら、モルドレッドをボソソジャンプで基地に戻しておく。

『少し時間がかかるから、ここで休憩してきな』

『分かった』

『よし、着陸だ』

音が乱れてから、正常に戻った。どうやら、無事に着いたみたいだ

な。

『また後で』

スーツを着た男が輸送機を降りて町に出たのを飛行場の監視カメラで確認して、近づく。

「マスター、観られてる」

「え？」

周りを見ると視線が集まっている。そうだね、街中にドレスと着飾った騎士のようなコスプレをしていたら仕方ないよね。

「あそこの服屋に入ろう」

「うん」

私とアーニヤは、急いで店に入り服を購入する。

購入した服は私がTV番13話のエピローグで奏が着ていたの。アーニヤがこれまたエピローグのオレンジ畑を育てていた時の服を選びました。

「目標は？」

「大丈夫、ここから大通り600メートル先の交差点を右に曲がった先にある喫茶店に入った」

「ありがとうアーニヤ」

アーニヤがほんの少し虚空を見詰めた後、私の質問に答えてくれた。おそらく、この町に設置されている監視カメラの映像を傍受して解析したんだと思う。

「ゼロ、便利」

「確かに……………」

私達は、煉瓦が敷き詰められた中世のような町並みの中を走り、目的の喫茶店に入った。

「いらっしやっい。これは可愛らしいお客さんだ」

入った瞬間、コーヒーのいい匂いがして来た。

「ご注文は？」

「ブラック、後はマスターのオススメで」

「私はケーキ」

「はいよ」

カウンターに座って、周りを見渡す。すると、目標がない……………
…アーニヤが何も言っていないとなると、まだ中にいる。

「ちょっと行ってくる」

「いつてらっしやい」

私はトイレに向かう。

トイレの中には二人の気配があった。
私は男子トイレに入る。

「ちょっ、お嬢ちゃん、ここ男子トイレだよ!？」

これはハズレ。

「中に人はいました？ 探してるんですけど……………」

「んゝ、いたよ。直ぐに出て来るだろうし、外で待ってな」

「はい、ありがとうございます」

男の人と外に出て、私は扉の前で待つ。

少しすると、水音が聴こえて来たので構える。

「ふう……………えっ？」

出て来た男を確認した瞬間、ガードスキルバージョン1で剣を作り、男の胸を突き刺しトイレの中に押し込んだ。

「がはっ……………な、何を……………」

「貴方に怨みはありません……………有りましたね。仕方ないとはいえ、あれは私の傑作の一つだったんですから」

「く……………そ……………」

「お休みなさい。良い夢を……………」

ドアに鍵を掛けて、男を奥に引きずる。

「名前はケイ・イズミ……………生体データをスキャン」

持ち物を漁り、全てを回収したら、調度スキャンが終了した。

「変化」

AngelPlayerを使つて、肉体をケイに作り変える。

「よし、問題無し」

鏡でいろいろ確認してみる。問題は服だけです。

「死体は処理して来ましょう」

ボソソジャンプで死体を基地に運び、自動人形に血を綺麗に掃除させて終わり。私は返り血なんか受けていない。

「ただいま」

「お帰り」

「できてるよ」

マスターの出してくれたコーヒーを堪能しながら、アーニヤのケーキを少しもらう。

「あゝん」

「うん、いけるね」

「うん」

一仕事を終えた感じでお茶を終えた後、男の分を含んで、多めの五倍の金額を支払いって外にでました。

次に、服屋で男の服を買って、裏路地で変化を行い、確認する。

「問題ないよね？」

「うん、大丈夫」

「じゃあ、これからアーニヤはモルドレッドでしばらく待機をお願い」

「了解。気をつけて……………」

「うん」

私はアーニヤと別れて、輸送機に搭乗した。

第ハラボに着いたて、諸々の手続きが終了し、試験を受けさせられた。

「ケイ・イズミ君。君は素晴らしい！ ランクBの研究員の資格が与えられた。ランクBは個人の研究室とモルモットが二体与えられ

る」

「はい」

「モルモットのリストはこれだ。どれも処女、童貞だ」

表示されたリストには、番号、顔、性別、年齢、身長、体重など様々な事が書かれていた。

「この中から、好きに選んでいいんですか？」

「うむ」

私は、リストの中にあつた目的と明らかにおかしい少女を選択する。

「では、ナンバー256とナンバー868」

「了解した。ナンバー256番ステラ・ルーシェとナンバー868番ルリ・ホシノだな」

「はい」

これが神の言つてたサポートだろうな。

「研究員の健康管理のためもあるので、この二人は一ヶ月に一度確認があるから犯しておくように。精神が壊れていた方がマインドコントロールが効きやすいので、壊してもかまわんからな」

「了解しました」

「成果はホストコンピュータに送っておいてくれ」

「はい」

説明が終わったのか、研究室の鍵と地図を貰って部屋に向かった。とりあえず、ルリとステラをしつかりと育てよう。

第八研究所1（後書き）

やつと艦長とメインパイロット二人めです

バトロワ

第八研究所の新任研究員ケイ・イズミになりました私は、届けられた二人を見る。

「こちらが、モルモットです。確認をお願いします」

二人の首輪に繋がった鎖を持った係員の指示に従い、受領サインをする。

「それでは、失礼します」

邪魔者が居なくなつたので、改めて二人の幼い少女をみる。歳は私と同じ、八歳くらい。金の髪と水色の髪が印象的だ。そして、両手両足に手枷と足枷が、首には首輪とリードが付けられて痛々しい姿だ。

「さてと、私は……………」

ケイも本当の名前じゃないし、本名もまずいよな……………適当でいいか……………む、あれは……………あれ着せるならそれでいいや。

「君達のご主人様だ」

「「ご主人様……………」」

二人は虚ろな表情で、マインドコントロールの刷り込みが行われたようだ。

「そう……………よし、外れた」

手枷や足枷、リードを外す。首輪は認証タグが付いているから、外したらまずい。

「次はこれに着替えて」

「うん」「はい」

二人に何故かあったメイド服を渡すと、目の前で着替えだした。少し、視線をずらしておく。

「着替えた」

「着替えました」

「じゃあ、まずは……………」

それから、私は二人の身体検査、運動など仲良くなる事を重点的に行っていった。

ここに来てから一ヶ月、予定通りステラとルリの二人は懐いてくれた。

まあ、二人に他の人がどういう扱いを受けているかなどを実際に見せて教えたから、かなり楽でした。

後、アーニヤを助手として招き入れた。当然、アーニヤの人形は処理しました。

「二人共、覚悟はいいの？」

「はい。私の身体は既に改造されていますから……………構いません」
ルリはナデシコに乗る前、つまり、研究所にいて弄られているところを召喚されて捕まったみたい。
ルリとしては、私に助けられた感じ……………特にアキトやユリカと会っていないしね。

「ステラ、ご主人様好きだからいい」

ステラは愛情を与えて貰えなかったからか、愛情を与えたら簡単にに堕ちました。

「それじゃ、やろうか」

「はい（うん）」

そして、二人を本格的に改造する。エブレイン、マシンチャイルド、ゼロシステムを標準装備。更にルリのエブレインは演算処理とゼロシステムにのみ特化させたら……………赤鳩みたいにできるようになった。

ステラは左右の脳にエブレインが一個ずつになった。
これからは、ルリがオペレーター件艦長の修行、ステラはひたすら高速戦闘の格闘戦に特化させた修行を行う。
どちらもシュミレーターでだけどね。

培養槽に入った二人を観ていると、アーニヤが報告に来た。

「マスター、ガンタンクの特許と開発報酬が出た」

この第八研究所の怖いところは兵器ならなんでもいい所だ。

「これで準備が整った」

「うん」

私はガンタンクによってAランク……………つまり、ドックが一つ貰えた。

これによって、研究所の付属施設ではなく、好きに使える私設ドックが手に入ったんです。

それから、早速ドックへ行って盗聴、盗撮などを排除して儀式を行う。

「召喚するのは二つ。材料は腐るほどあるから平気」

この第八研究所には怨念が満ち溢れているから、それをエネルギーとする。

召喚されたのはナデシコCと410m級重砲撃艦ゴルノヴァ。

「さあ、改造するよ！」

ちなみに、相転移エンジンはインフレーション理論で説明される真空の相転移を利用し、真空の空間をエネルギー準位の高い状態から、低い状態へ相転移させる事でエネルギーを取り出す。

ナデシコCは、全長298m、全高106.8m、全幅148m、総重量37,530トン、収容人員214名

410m級重砲撃艦ゴルノヴァは、魔王の武器“烈光の剣”（これが「スレイヤーズ」の「光の剣」と同じものだとされている）にちなんで命名された。多数のビーム砲を装備し、空間を歪めての「空間レンズ」で収束して威力を高めたり、拡散させて広範囲を攻撃したりすることが可能。また、弾道が歪曲されてしまったため、リープ・レールガン以外の攻撃手段では有効打を与えることは困難。ただし、艦首の「目」付近だけは外部の様子を「見る」ために歪曲の対象外であり、ここが弱点となっている。

「この二つを融合させる。形のメインはナデシコで行く」

「うん。改造用に自動人形も呼び寄せた」

「ありがとうアーニヤ。ルリとステラが培養槽から出られるまで結構時間がかかる（中で学習している）から、出て来るまでに頑張ろう」

「うん」

それから、私達は二艦を分解、融合させていった。

ロンドンの街中を楽しそうに歩く銀髪の少女、その隣にいる男性。その少女に同じく銀髪の少女がぶつかった。

「っ!？」

「マスターっ!？」

男性と少女は驚いた。なぜなら、彼女は胸を後ろからぶつかった少女の腕から伸びた剣によって貫かれていたのだから。

「まず一人」

「カナデ、なぜだっ!？」

「坊やだからさ……………そして、貴方もいない……………」

男もあっさりと殺され、再起動したのか、周りからも次々と悲鳴があがった。

「全く、ザビ家なんて……………」

その少女の言葉は続かない。なぜなら、彼女の頭は突如飛来した弾丸により吹き飛ばされたのだから。

その現場から800メートル離れた先にあるビルの屋上。そこには、先程の少女とその殺されたもう一人の少女とそっくりな少女がいた。

「ミッションコンプリート……………これで私は勝者に近く……………」

少女……………ハーモニクスのカナデは先程使ったアンチマテリアルライフルヘカート？を肩に担いだ。

「油断大敵だよ……………私……………」

「っ！」

ヘカート？を担いだカナデは首筋から、盛大に血を何も盛大噴き出した。

そして、何も無い空間から血塗られた刃を伸ばしたカナデが現れた。

「ミラージュコロイド……………便利ですよ？」

「そうだね。髪の毛を金色にした徹底的だしね」

「早いですね……………」

屋上の給水塔に座った同じカナデが存在した。

「私も狙っていたからね」

「そう……………」

「じゃあ、はじめようか……………」

お互いにガードスキルを起動して、人間が出せる速度を超えた斬り合いが始まった。

数時間後、残ったのは金色に染めたカナデ。

「強かった……………」

カナデは身体中の至るところから血を流して、死にかけているのが一目瞭然だ。

「……………ここにいたら……………まずい……………ジャンプ……………」

彼女は生き残るため……………彼女は適当に転移した。

「あらら、大丈夫ですか？」

「……………」

「これはイケませんね……………お父様、こちらですっ！」

バトロワ（後書き）

カナデVSカナデでした。

ザフト編？ ラクスとラウ様降臨！（前書き）

すいません、二話目の投稿が出来ていませんでした。だから、投稿しなおしておきました。

ザフト編？ ラクスとラウ様降臨！

S i d e ? ? ?

目が覚めた私の目の前には知らない天井がありました……………ここはどこ？ 確か私と同じハーモニクスと戦って勝って……………危ない所をジャンプしたはずですよ。

改めて周りを見渡すと、綺麗な花々が咲き誇る庭園でした。先程の天井は天蓋かな？

「あつ、気が付きましたか？」

ピンク色をした少女……………見覚えはないです……………この人が助けてくれたのかな？

「はい……………」

掛かっている柔らかい布団を口元まで引き寄せて、少女を見つめる。いつでも攻撃できるように……………私はまだ死ぬ気は無いですから。

「それはよかったです。もう、一週間も眼を覚まさなかったので心配いたしました」

「一週間……………」

とりあえず、安全みたいなので私のステータスを確認しましょう。

ステータス

技術レベル 6

開発レベル 7

操縦レベル 4

戦闘レベル 8

経営レベル 1

肉体レベル 7

召喚レベル 4

魔力レベル 1

召喚回数残り 14

錬金術使用回数残り 12

肉体レベルが上がっているし、魔力レベルが増えているのかな？

召喚回数は、私自身がミラーージュコロイドの発生装置で1回使っているから、倒した人達の方だと思います。錬金術も同じだと思います。

「あの〜〜大丈夫ですか〜〜？」

「はい、大丈夫です。ここはどこですか？」

「ここはプラントにある私の家ですわ。あつ、申し遅れました私は、ラクス・クラインと申しますの。貴女は？」

「私は……………」

このままカナデと名乗るのはまずいです。特にオーブと関わるラク

スさんにだとかなりまずいです。

辺りを見渡すと鏡の中に一人の少女の姿がありました。

「ユーリ？」

「ユーリさんと言つのですね」

「いや、違つ……………」
「あつ、お医者様を呼んで来ませんとっ！」
……………
「言っちゃいました……………」

鏡に映つたのは砕け得ぬ闇、システムU D、紫天の盟主……………
ユーリ・エーベルヴァインでした。

『ちゃお！ 金髪だったから気分的にその姿にしといたよ。感謝してね』

この神様は……………面白ければなんでもいいのかな？

『イグザクトリイ！ あつ、ちゃんと紫天の書も用意しといたよ』
という事はあの三人娘もいるんですね。

『あつ、ユーリ・エーベルヴァインの名前で住民登録とかしておいたから感謝してよね。あつ、面倒が無いように孤児として設定してあるからね。バイバイ……………』

その言葉を残して神様は帰って行きました。

「おいで、紫天の書……………」

呼ぶと全体が紫色で、真ん中に金色の十字があしらわれた本が現れました。

「一部を除いて内容は白紙……………あの三人は召喚でないみたいですね」

書かれていたのは私の名前ユーリ・エーベルヴァインと市民登録番号でした。

「こちらです」

「このお嬢さんですか……………」

それから、ラクスさんが連れて来たお医者さんの診察を受けました。

お医者さんの最初の診断結果は、栄養失調による気絶だったらしいので、栄養の高い点滴を入れられていたから、もう大丈夫みたいです。

「それで、お家が無いんですか？」

「はい……………両親は死んでしまっ……………」

「ごめんなさい……………」

実際、間違っています。私達を産んだ両親は私達が殺しましたから。

「そうですわ！」

「なっ、なんですか？」

いきなり大きな声にびっくりしていました。

「貴女、私の妹になりませんか？」

「……………」

後ろ盾には丁度いいけど……………途中で反逆者になるよね……………でも、それまでにザフトで高い地位にいればいいだけだね。

「はい。よろしくお願いし……………わぶっ！」

ラクスさんに抱き着かれて、凶器に挟まれましたの。

「私、妹が欲しかったのです」

それから、私はユーリ・クラインとなり安定した生活を手に入れたの。まあ、ラクスお姉ちゃんの襲撃さえなければですけど。

お姉ちゃんの抱き着き癖はどうにかしてほしいの。死ぬほど苦しいから……………あの柔らかい肉の塊は敵です。

私がラクスお姉ちゃんの妹になってから一年、九歳になった私はお父様にプラントの技術部に連れて行って貰いました。

「これはクライン議員、どうしましたか？」

「すまんね……………娘がどうしても見学したいと一年くらい言っていてね。一応、上の許可は貰っているよ。すまんが、よろしく頼むよ」

「はあ……………わかりました……………」

「よろしくお願いします」

スカートの裾を掴みながら、頭を下げて笑顔でお願いしました。

「わっ、わかりました！ 後でサイン下さい！」

私はお姉ちゃんと違って、ネットアイドル……………ミクちゃんみたいに歌っています。

「まあ、後は任せたよ……………私は仕事があるのでね。ユーリ、迷惑を掛けないようにね」

「はい、お父様……………迷惑はかけません」

今日はお父様が技術部の上層部と会談するついでについて来ました。

「では、こちらにどうぞ」

そして、私は研究員さんに付いて行きました。

ゲストパスを頂いていった先は、何やら慌ただしく人々が働いていました。

「こちらは食料生産プラントについて研究している場所です」

「ふむふむ」

説明を聞いていると、爆発音が聞こえて来たの。

「何事だっ！」

「MSの動力炉開発部で爆発です！ 空いている人は手を貸してあげて！」

ジンかな？

「すみません、お嬢様……………安全が確認出来るまでこちらに座ってお待ちください。ここなら警備員もいますから」

「わかりました。このパソコンで遊んでもいいですか？」

「お好きにどうぞ！」

研究員さんは去って行ったので、私はパソコンの前に座ってゲストIDログインしました。

「これは食料生産プラントの設計シュミレーションですね」

起動した画面に有ったアイコンをクリックして起動させたのはシュミレーションでした。

「んと、ここを弄って……………こちらはプログラムを書き換えて…

……」

OSから構造、部品まで作り替えて……時間を忘れて作り上げました。

「うん、これで完成かな？ 生産数は四倍、生産速度も三倍増えるし……評価はS……やった」

「ほう、素晴らしい出来だ」

「え？」

慌てて後ろを振り返ると、仮面を付けた金髪の人がありました……
…カッコイイです………この人はまさかのあの人ではないですか？

「すまない、驚かしてしまったようだね。私はラウル・クルーゼという者だ。見ての通りザフトの人間だ」

今はザフト成立から一年ですから、この人は20歳ですね。私とは11歳です。

「ラウ様、私はユーリ・クラインと申します。よろしく願います」

「よろしく。実は君の父上、クライン議員から君の護衛と案内を頼まれてね。クライン議員はどうやら、お仕事が長引くようだね」

時計を見ると、素手に二時間が経過していました。

「わかりました。よろしく願います」

立ち上がろうとしたら、手を差し出されたので、手を取って、立ち上がらせて貰いました。

「行く前にこのデータを提出してもいいかね？」

「はい、どうぞ」

「では、提出者ユーリ・クライン……………送信……………では、行くかお姫様」

「はい」

あれ？

何かまずい気もしますが気にしないでいいよね？
うん、気の性気の性。

ラウ様に案内されながら、色々な所を回りました。

「これであらかた回ったが……………どうするね？」

「ラウ様、モバイルスーツが見たいです」

「ラウ様は止めて欲しいのだが……………まあ、私のパスでは君を通せ無いんだ」

ラウ様には敬語を止めていただきました。

「そうですか……………でも、私のパスは何処でも入れますよ？」

「ちょっと確認させてくれ……………」

「どうぞ……………」

「……………あの親バカは……………」

ボソツと呟いた言葉に、ラウ様の気持ちちが籠っています。

「どうやら問題無いようだね。では、行こうかお姫様」

「はい」

連れて行って貰った場所にはジンが三機ありました。

ジン

型式番号： ZGMF - 1017

所属：ザフト

全高： 21.43m

武装：

MMI - M8A3 76mm重突撃機銃

MA - M3 重斬刀

M69 バルルス改特火重粒子砲

M68 キャットウス500mm無反動砲

M66 キヤニス短距離誘導弾発射筒×2

M68 パルデユス3連装短距離誘導弾発

射筒×2

スナイパーライフル

紫天の書のページにこんなのが浮き出て来ました。

「おっきいです……………」

「あちらには新型があるな」

そちらにはシグーばい骨組みがありました。

「ん〜」

「どうした？」

「ジンにしても、シグーにしても性能が低いですね」

ガンダムを見ているとそう思いますよね。ザクより下なんですから。

「新型機を低いと言われてもな……………」

「あれ？ 子供の戯れ事と思わない……………？」

「あのシュミレーションを見せられたら、お姫様をただの子供とは思わないね」

「なら、賭けをしませんか？」

「何を賭けるんだ？」

「お互い、勝った方の言う事をなんでも聴くという事。勝負はモビルスーツのシュミレーションです」

「いいだろう。だが、ハンデはあげよう」

「でしたら、私は自分の機体を使いますね」

「あるのか……………まあ、いい」

それから、シュミレーションルームに移動して、私はジンの代わりに今の姿にある意味ピッタリな機体を紫天の書からロードしました。

シュミレーションに入って、シートベルトを無理矢理締めて……………問題がありました。

「手足が届かないっ!？」

『どうした?』

「すみません、ちょっと待っててください」

『わかった』

私は首筋からエブレインのコードを引き抜いて、シュミレーションシステムに突き刺して、キーボードを取り出してOSを書き換えました。

作業時間は10分くらいです。

「お待たせ……………しました……………」

『いや、構わないよ。ステージは宇宙にしておいた』

「はい。お手柔らかにお願いします」

『フフ、それはわからないな』

ラウ様が消えて、発射シークエンスに入りました。

「こう言う時は……………ユーリ・クライン……………出ます！」

私は初めてのMS戦に挑みました。相手はラウ・ル・クルーゼ様………相手に取って不足はありません。

S i d e O u t

ザフト編？ ラクスとラウ様降臨！（後書き）

タイトルの闇ちゃんは砕け得ぬ闇の闇ちゃんでした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3078z/>

カナデちゃんとヤミちゃんが機動戦士ガンダムSEEDで暴れるよ～！

2011年12月28日22時47分発行